

ディテクティブ

2007(平成19)年10月13日鑑賞(ユウラク座)

★★★



監督＝サイモン・フェローズ/出演＝ジャン＝クロード・ヴァン・ダム/スティーヴン・レイ/セリーナ・ギルズ/ウェス・ロビンソン/マーク・ダイヤモンド/ウィリアム・アッシュ/スティーヴン・ロード/ゲイリー・ビードル/C.ゲロッド・ハリス/バフィー・デイヴィス (アートポート、AMG エンタテインメント配給/2006年アメリカ映画/113分)

第3章

ヒネリの効いた設定・ラストが新鮮！

……スタローン、シュワルツェネッガーに続くアクションヒーローがものすごいイメチェン！ 潜入捜査の失敗、麻薬中毒、警察での孤立、妻からの三下り半、そして挙げ句の果てに頭をぶち抜かれて植物状態に……。さて、ここからの再生と奇跡の復活は……？ そして、宿命のライバルとの最後の対決は……？

ミイラ取りがミイラに

8月25日に観たりチャード・ギア主演の『消えた天使』(07年)は、性犯罪登録者の監視を続けてきた公共安全局の監察官が心身共に消耗していく中、何が善で何が悪かわからなくなり、無茶苦茶な行動をとる姿を描いたちょっと不思議な物語だった。そして『ディテクティブ』も、ある意味では麻薬捜査官が麻薬中毒となり、「汚れた英雄」として葬られていく物語……？

舞台はニューオーリンズのフレンチ・クォーター。ここは眠らないまちで、麻薬絡みの暴力と背徳が横行しているまちらしい。そのまちで今、麻薬捜査官のアンソニー・ストウ(ジャン＝クロード・ヴァン・ダム)はおとり捜査の取引現場の部屋の外で、まさに突入しようとする瞬間を見計らっていた。ストウが目指すターゲットは、ストウの元同僚の刑事だったが、今は大物ドラッグマフィアとして頭角を現しているガブリエル・キャラハン(スティーヴン・レイ)。おとり捜査は成功、と思ったのも束の間、マイクの音が突然入らなくなった混乱の間に、狡猾なガブリエルは女性捜査官を殺害し、銃撃戦の中ままと逃走してしまった。その結果、おとり捜査は見事に

失敗したうえ、女性捜査官を殉職死させてしまったストウは、同僚達から白眼視され、「汚れた英雄」はますます麻薬中毒に陥っていくことに……。

ひょっとしてアメリカには、公共安全局の監察官でも警察の麻薬捜査官でも、こんな風にミイラ取りがミイラになるケースがたくさんあるの……？

家庭崩壊もここまでいけば

私には麻薬中毒の警察官が堂々と仕事していること自体がよく理解できないが、そんな「汚れた英雄」は売春婦に対して、平然と「捕まりたくなければ、俺に一発やらせろ」とムチャクチャな要求を……。そんな荒れ果てた夫の生活ぶりにトコトン嫌気がさしたのか、美しい妻のヴァレリー（セリーナ・ギルズ）は妊娠したことをストウに告げたが、同時に「あなたの子供じゃないワ」と言われたから、ストウは大ショック。

ここまで家庭崩壊が進めばひどいもので、そうなるストウの麻薬中毒はさらに進む一方。もっとも、いくら亭主の生活ぶりが気に入らないからといって、妻の方もそこまでやるか、という感じも……。さて、そんな発言をしたヴァレリーの本意とその真相は……？

孤立化はさらに

元は優秀な麻薬捜査官だったのかもしれないが、①おとり捜査の大失敗、②女性捜査官の殉職死、③麻薬中毒の進行、④妻からの強烈な告白等の中、ストウの行動は乱暴を極めるようになり、警察内での孤立化をどんどんと深めていくことに。

そんな中、ストウはここでも嫌味な行動を。すなわち、ストウは定年間近のウォルター巡査から、「甥っ子がマリファナの売買で捕まったので何とかその罪をもみ消してくれ、お互い様だろう」と頼まれたことを上司に密告。そのため同巡査はトイレの中に籠城してストウを呼べと要求。ストウが姿を現すとウォルターは、ストウに対して「警察とは一体何か」という本質的な問いかけをしたまま、素直に逮捕されることに……。

もちろん、ストウはそれに対して何の回答もできなかったが、ウォルターのこの「魂の問いかけ」はストウの心に対してどのように響いたのだろうか……？

無茶苦茶な単独行動の結末は……？

刑事の捜査は相棒とのコンビによるべきものと、相場が決まっている。しかし警察内で孤立してしまい、今や同僚の刑事すら信用できなくなったストウは、新たにつけられた若手の相棒サージ（ウィリアム・アッシュ）と打ち合わせもしないまま、無茶苦茶な単独行動に……。ストウが急行したのは、キャラハンと組んでいる疑惑のある警備員が住むアパート。そこでチャド（ウェス・ロビンソン）という若者と出会い、「キャラハンを見かけたら教えてくれ」と言い残してアパート内へ突入したが……。

こちらあたりの心理戦と突入戦の様子は結構面白いが、キャラハンの姿が見えないだけに少し不気味。またストウは、キャラハン逮捕の執念だけでやみくもに動いている感じだから、危なっかしいことおびただしい。しかもセオリー抜きの単独行動だ。1度は、後を追っかけてきたサージの拳銃によって間一髪危機を免れることができたが、バーのなじみの女に誘い出された場面では、まんまとキャラハンのワナにはまってしまう、遂に囚われの身に。

こうなればみじめなもので、キャラハンから「俺は、お前の妻を抱いたんだぜ」というすごいセリフを聞かされた直後、顎に据えられたキャラハンの拳銃が火を吹いた。さすがにこれは致命傷。パンフレットにデカデカと書かれているように「ヴァン・ダム死す!?!」、誰しもそう思ったはずだが……。

ストウの再生と奇跡の復活は……？

私はよく知らなかったが、パンフレットによれば、主人公ストウを演じたジャン＝クロード・ヴァン・ダムは、スタローン、シュワルツェネッガーに続くニューアクションヒーローで、「その肉体を惜し気もなくスクリーンに叩き付けた」俳優らしい。

しかし、この映画前半のストウは潜入捜査の失敗からドラッグに溺れ、「汚れた英雄」と呼ばれている、わりとみじめったらしい警察官。そして、キャラハンの拳銃から放たれた弾は、顎から頭蓋骨へ貫通していったらしい。したがって、幸い命はとりとめたものの、ストウは完全な植物状態となり、いつ意識が回復するか全くわからない状態。すると、この映画後半のストーリーは一体どうなるの……？

思わずそんないらざる心配をしてしまったが、きっと後半はストウの再生と奇跡の復活が、そしてクライマックスでは、再度のキャラハンとの対決が待ち受けているは

ず……？ そんな予想をしていると、案の定それから半年、ベッドの上でストウの目が開いた。さあ、ここからが後半戦の開始だが……。

しばらくは、悔悟の日々を

サイモン・フェローズ監督としては、早く次のストーリーを展開させていきたいだろうが、これだけの重傷者をいきなり歩かせたり、拳銃を握らせたのではあまりに不自然。そこで、しばらくはストウの身体のリハビリの様子と心のリハビリの様子を描いていくことに。さしあたって、ベッドに寝たきり状態のストウを引き取り世話をするのは、一体誰……？ 本来それは誰もいないはずだが、ここで名乗り出たのが、今は別の男と幸せに暮らしているはずの別れた妻ヴァレリー。私の見るところ、ここらあたりのストーリーづくりには多少ムリがある。だって、なんで今さら別れた妻が、寝たきり状態のストウを引き取らなければならないの……？ しかも、ヴァレリーが現在の恋人と一緒に暮らしている同じ屋根の下に……？

そんな不自然さと居心地の悪さを最も強く感じたのは当然ストウ自身だろうが、そんな中、まさに九死に一生を得たストウは少しずつ再生していくことができるのだろうか？ ここで私が気になるのは、やはりキャラハンが言った「俺は、お前の妻を抱いたんだぜ」という言葉。果たしてヴァレリーはそんなこともキレイに忘れて、ストウに対して今のような世話をしているのだろうか……？

まあ、どちらにしてもストウがしばらくの間、悔悟の日々を過ごさなければならなかったのは当然……？

再び警察に復活……？

この映画はストウのリハビリと闘病生活を描くことが目的ではないから、ストウが起きあがったり、歩き回ったりするのが多少早いのは仕方なし。しかし、ストウが再び警察を訪れ、キャラハン逮捕のため現役復帰をしたいと申し出たのにはビックリ。いくら何でもそれは……？

また、ある日ストウはある家を訪れたが、ドアを開けて出てきたおばさんからは、いきなり「よくも顔を出せたものだね」と悪態をつかれる始末。一体これは誰の家……？ そして、ストウは何をするためこの家を訪れたの……？ それはストウの心の再生ぶりを強く印象づけるものだが、その内容はここには書かず、皆さんの映画を

観てのお楽しみとしておこよう……。

🎬クライマックスは……？ ストウとヴァレリーの復活は……？

身体と精神が大きく復活してきたストウが再びキャラハン逮捕に情熱を燃やし始めた今、キャラハンは既にニューオーリンズ一帯の暗黒街を制圧し君臨する大きな存在になっていた。そんな中、ストウの相棒だったサージも、既に彼の手にかかって無念の死を……。そして、再びストウが動き始めたことを知ったキャラハンは、先手を打ってストウとヴァレリーを襲う手はずを……。そんな中、遂に訪れるのがストウとキャラハンとの最後の対決。

他方、ストウの再生を知ったヴァレリーは、やはり既定路線どおり新しい恋人との生活を選ぶのだろうか……？ それとも、かつてのやさしく正義感の強いストウの姿を見るに及んで、ストウとの復活がありうるのだろうか……？ そんなクライマックスと2人の関係の復活については、是非あなたが目で……。

2007(平成19)年10月27日記

第3章

ヒネリの効いた設定・ラストが新鮮！

ミニコラム

殺人事件に公訴時効なし！

08年2月24日、ロス市警が妻の一美さんに対する殺人と共謀の容疑で三浦和義容疑者を逮捕したというニュースが日本中を駆け巡った。いわゆる「ロス疑惑」については、03年3月の最高裁判決で三浦被告人の無罪が確定したのに今頃、一体なぜ？

論点は2つある。一事不再理の原則と公訴時効だ。憲法上の大原則である前者は、サイバンで選任された2人の私選弁護人によって、今後面白い議論が展開されそうだ。他方、殺人の公訴時効は日本では05年に15年から25年に

延ばされたが、カリフォルニアの州法では保険金殺人などの1級殺人には時効は存在しないらしい。

公訴時効の趣旨は、時の経過による①応報感情の薄れと②証拠の散逸による立証の困難性だが、今やDNA鑑定は著しいから、②の意義は薄れている。被告人と弁護人にとっては「公訴時効なし」は大変なハンディだが、日米を股にかけた重大な論点が登場したことはまちがいない。腰を据えて、しっかり勉強したいものだ。

2008(平成20)年3月6日